
ラグナロクオンラインSS 短編 Devil's DanceHall

梶原 ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクオンラインSS 短編 Devil's Dance Hall

【Nコード】

N4049P

【作者名】

梶原？

【あらすじ】

新メンバー、ソニアも加わり結構賑やかになってきたギルド【バリアントユニオン】。

そんな日常に突如舞い込んでくる舞踏会への招待！舞い上がるエリイだったが、そこにはある隠された秘密が！？まあ話を持ち込んだ人があれなので上手い話な訳でも無かったのだが……。災難続きのエリイに今度は一体何が！！クリス「今度こそぬぎ（以下略」エリイ「ぬぎません！！」

その1（前書き）

こんにちわ、梶原です。懲りずに見ていただけてありがとうございます。

今回は短編ですが、少し長いので2〜3回ほどに分けようかと思います。

もう毎度の事ですが、この作品はラグナロクオンラインがベースとなっているだけで中身の登場人物、スキル、価値観などは全てオリジナルとなっております。ご了承くださいませ！

その1

ラグナロクオンラインSS 短編

Devil's Dance Hall

『その素敵なお嬢さん、私めと一緒に一曲踊ってはくれませんか？』

『私であれば、ぜひ一緒にさせて下さい・・・！』

派手な貴族らしいタキシードを着た男性が、恐らくその男が主催であろう舞踏会にいた一人の女性をダンスへと誘っている。

その男性は見た感じ、誰からも好かれそうな優しい表情に、整った顔立ち、長身の俗に言う「かつこいい」という部類に入りそうな風貌だ。

一方女性の方は、普段はともじやないが貴族の舞踏会など呼ばれるはずもない田舎の町娘らしく、そこで何があったのか招待されてしまったという。着慣れない豪華なドレスに身を包み、馴染めない雰囲気在意気消沈してた所を男性に声を掛けられたといったところだ。

あとの話は大体わかるだろう。ベタな展開なのは眼に見えている。それなのに

「こういうのついていいですよね・・・！」

その光景に瞳を輝かせている人物がいる。

銀色の少し桃色がかった長髪にその大きな瞳をうつとりさせながらエリイは感嘆としていた。

「こんな優男の何がいいのかボクにはよくわからないよ。」

その隣でつまらなそうにしているのはリエンだ。

エリイとは対照的な黒く艶やかなロングヘアを頭の両端でお団子状にしている。

今二人がいるのは、フェイヨンにある冒険者ギルド【ヴァリアントユニオン】の本部兼住居としてある屋敷のリビングだ。そこには大きなモニターが設置されてる。プロンテラにある放送局から、ルーンミッドガッツ王国全土へと配信している番組を受信し、いつでも閲覧できる装置だ。俗にテレビとも言われる。

リビングには中央に大きなテーブルも置いてあり、大体ここに住んでいる者はそこで食事をとったり団欒したりするのだ。

「ソニアもこういうの憧れるなあー！」

傍にはまだ10歳ほどの、朱色した髪の毛の少女がちょこんと椅子に座ってテレビを見ている。

この前の騒動で預かる事になったのだが、今はもう普通に皆と解け込んでいるようだ。

「リエンさんは夢が無いですねえ。」

「ねえー！」

エリイとソニアが声を揃えて言う。

「ボクはもつとがっちりした頼りがいのある男がいいな。」

テーブルに頬づえをつきながらつまらそうに言うリエン。

「何かちよつと殴ったらすぐ折れちゃいそうでしょ？そういうのはな。」

「殴らないで下さい・・・。」

リエンの一言にため息をつくエリイ。

元がいわゆる格闘系だからなのか、どうも自分とちよつと基準が違う。

体育会系と文系の違いと言うべきか。

どっちかというと、クリスと趣向が似ているのかもしれない。

「あれ、そういえばクリスさんは？」

そこで思い出したようにエリイが言う。

「あー、そういえば朝から本部に呼ばれたなんて慌しく出て行ったような気がしたよ。」

テーブルに置いてあるお茶菓子をポリポリと食べながら答えるリエ

ン。

今日は非番だったはずなのだが、こうやって呼ばれる事は少くない。結構自由になっているように見えるが、割と忙しいようだ。

「そうなんですかぁ・・・。」

ちよつと残念そうに言うエリイ。

その表情を見て、リエンがすかさず

「エリイ・・・。残念ながらクリスは女なんだよ。」

と、肩を叩きながら諭すように言う。

「ち、ちがいますよ！！何を勘違いしてるんです！？私とクリスさんはそういう関係じゃー！！」

鳩が豆鉄砲をくらったように驚きながら、それでも訂正を入れようとする。

「いやいや、ごめんごめん。誰もそこまで言っただけでいい。」

あまりにもエリイが取り乱すので、ちよつと申し訳なさそうにあやまるリエン。

「エリイおねえちゃん、クリスおねえちゃんが好きなの？」

そんな空気などおかまい無しに無邪気に聞いてくるのはソニア。

「なっ！ソニアちゃんまで！」

急にドギマギするエリイ。

「ソニアもクリスおねえちゃん好きだよー！」

そんなエリイとは関係無しに言うソニアにぶつと吹き出すリエン。

「あははは！違うよソニアちゃん！そういう意味じゃないって！」
そう言っ腹を抱えて笑い出す。

「結局そうやってからかうんですねー！！」

それを見てあきらかに不機嫌そうに頬を膨らませて怒るエリイ。

「まあまあ。でもエリイはそういうところ行ってみたいの？」

軽く宥めながら話題を違う方へと逸らす。

「やっぱり懂れますよ。一生に一回は体験してみたいです。」

さっきのテレビを思い出したのか、またうつとりした表情に戻るエリイ。

単純な子だな」と思いながら

「まあボクたちには一生縁が無い世界だけだねえ。」

現実を見るような冷めた目で言うリエン。

「そうやってすぐリエンさんは夢を壊すー!」

などとエリイが言う

「あら、意外とそんなことも無いわよ?」

突如エリイ達がいる部屋の入口から声がする。

「うわぁ! クリスさん!」

急に驚いた表情を見せたのはエリイだ。

「ん? どうしたのよエリイ。そんなびつくりさせた?」

怪訝そうな表情でエリイ達へと近づいてくる。

「わっ! わっ! 違います! これは違うんです!」

取り乱すエリイに

「この子は置いといて大丈夫だよ。それよりそんなことないってどゆこと?」

と、エリイを庇うかのように話をまた違う方へと逸らすリエン。

「ああ、それはね。」

と、クリスもエリイの隣の席へと着き、「あたしにもお茶ー!」とソニアに言いながら話し出す。

ソニアはそれを楽しそうにこなしている。

「兆度今日の夜、お偉いさんの舞踏会に招待されてるのよ。男女ペアで二人だけだね。」

そう言いつつ、一枚の招待状をテーブルへと置くクリス。

「おおー!!」

感嘆な声を上げるのはエリイとソニアだ。

「どうしたんですか! これどうしたんですか!」

興奮した表情でクリスへと詰め寄るエリイ。

先ほどのドギマギした状況などどこかへ流れてしまっていたようだ。

近づいてくる顔を軽く手で受け流しながら

「まあ、そう言っても仕事の一環なんだけど。関係あるのはあたし一人だけだからまだ後3人枠があるのよねえ。」

「そう言い軽く頂垂れるクリスに」

「そうだよねえ、やっぱり仕事関係だと思ったよ。そうでなきゃクリスが招待されるわけないもん。」

「冷めた表情を見せつつ言うリエン。」

「あら、あたしだって踊りの一つや二つくらい心得てるわよ?」

「失礼ねとばかりに胸を張るクリス。」

「でも何で男女ペアなんです?」

「そこに割って入るエリイ。」

「一応それが今回の舞踏会に招待される条件だね。年齢層も若々しい女性をメインとしているらしいから兆度いいんじゃない?」

「エリイの方を見ながらそう答える。」

「え!? あたしですか!？」

「驚きながらも嬉しそうな表情を見せるエリイを横目に」

「どうせリエンはこういうの興味無いでしょ? ソニアはまだ小さいから早いかな。」

「今度は二人の方へと視線を送ると、うんうんと無言で頷くリエンに対し、ええとその横で不満そうな声を上げるソニア。」

「そんな私なんかがいいんでしょうか!? あー着ていく服とかどうしましょう!? 踊れなくても大丈夫ですかね!？」

「そんな二人の事などお構いなしに舞い上がるエリイの声が聞こえてくる。」

「それを軽く促しながらリエンが」

「なーんか若々しい女性つてのがいやな感じだねえ。」

「と怪訝そうな顔をしながらクリスを見る。」

「まるで何かを隠しているんじゃないかと疑うように。」

「まあその主催者も若い美男子って噂よ。お嫁候補でも探してるんじゃないかしら? お金持ちでかっこいいなんて勝ち組よねえ。」
「リエンの視線を軽く流しながらクリスが言う。」

それを見て軽いため息をつきながら

「どっちにしるボクはパス。優男に興味はないよ、弱そうだし。」
ツンケンとしながら言う。

そんなリエンの後ろではもう男に迫られた時のシチュエーションの練習をしているエリイがいる。

「クリスの悪影響が始めてるんじゃない？」

リエンがボソッと言う。

「いやいや、あたしもあそこまでひどくないわよ。」

それを冷静につっこむクリス。

「あははは！エリイおねえちゃんおもしろーい！」

そう言ったソニアがおもしろいものでも見つけたかのようにエリイの行動を真似している。

この子達の先が思いやられるなあ、などと思いながら二人の行動を見ていると

「そういえば、男二人って誰がいくの？てか、ドレスとか持ってたっけ？」

思い出したようにリエンが聞いてくる。

「ああ、その辺はぬかりないわよ。その為のスペシャルゲストを用意したから。」

そう言いつつ、玄関の方を見ながら

「もうそろそろ来る頃じゃないかしら？」

そう言った時だ。

ピンポンと、呼び鈴の音が聞こえる。

「ほら来た。」

そう言いつつ、玄関の方へと向かうクリス。

いったい誰何だろうと様々な人物を思い浮かべるがどれもパツとしたのが出てこない。

自分の知り合いには貴族とは程遠い、かわいそうな人達ばかりだ。

我ながらちよつと情けないなあなどと思っていると、玄関の方から足音が聞こえてくる。

そしてリビングへと入るやいなや、

「はあゝい！みんな元気してるゝ？」

独特なトーンの声が部屋中を響き渡らせた。
頼杖をついていた顔がぐんと崩れ落ちる。

「スペシャルゲストって、ええー！ー！」

そうワンテンポ遅れてリエンの叫び声が鳴り響いた。

「まあ、そういうわけで。あたしが頼んだのよ。」

咳払いを一つ付き、説明を始めるクリス。

昼間の明るい日差しを浴びた室内とは打って変わって急に静まり返る室内。

やはりどこに行ってもこれはインパクトがあるらしい。

「あんらゝ。急に静かになっちゃってみんな大丈夫？？」

その中で一人だけ体をくねくねさせながら言う男性が一人。

黒く綺麗な短髪に、レンズの小さいお洒落な眼鏡をかけYシャツにネクタイと、どこか学者のようなイメージさえ浮かばせる感じだが、その男が、おねえ言葉を使っている。

「ああー！ー！セロさん！お久しぶりです！ー！」

そこでやっと気づいたエリイがまるで古い友人を見つけたかのように声を上げ近づいてくる。

「はあいエリイ！調子はどう？」

エリイとハイタッチを交わしながらまたも体をウネウネさせている。

「まだ記憶は戻りませんが、元気ですよー！」

エリイが嬉しそうに答える。

実はこの二人以前に面識があるのだが、こうやって会って話すのはその時以来だ。

「あははー！オカマだー！！」

傍にいたソニアもセロのキャラに興味を持ったらしくセロを指差し笑いながら近づいてくる。

「こーら、私はれっきとした乙女なのよ！」

そんなソニアのおでこを指で小突きながら言う。

「キモイ。」

一連の動きを見ていて、一言リエンがボソツと呟く。

「まゝたそう言っただけで本当につれないわね。リエンは。」

今度は体をくねらせながらリエンの元へと近づいていく。

「ひい！ちよ、ちよと近づかないでよ！」

体をセロから仰け反らせつつ、近くにいたクリスへとしがみつく。

見たところ、どうやらセロの事が苦手のようだ。

その反応を見ておもしろそうにニヤニヤするセロ。

「はいはい、それくらいにしときなさい。ちつとも話進まないから続けるわよ。」

しょうがないとばかりにクリスが口を挟む。

「今回セロに来てもらったのは条件である男役と、あたし達のコー
ディネートの為なのよ。」

「こーでいねーと？」

エリイが不思議そうに聞いてくる。

「セロはこう見えても中身はあたし達よりもよっぽど女っぽいのよ。
・・・何か言っただけで悲しくなってきたわ。」

墓穴を掘ったらしく、ちよとめまいがする。

「だから舞踏会用のドレスとかも持つてるのよね、何故か。それな
りに知識もあるからね。」

そう言くと、セロがおもむろに持ってきた大荷物を広げ始め

「じゃーん！！どう！？これなんて綺麗じゃない！？」

一体どうやって入れてきたのか、次々と色とりどりのドレスを見せ
びらかし始める。

色が際立つ赤色のドレスや、背中と胸元が開けたセクシーな黒いド
レスなどそれこそ多種多様だ。

「うわあああ！！！」

それに驚嘆とするエリイとソニア。

「これかわいいじゃないですか！！あーこっちもいいなあ！！！」

次々と出てくるドレスに目移りするエリイ。

それを見てセロが軽く唸りながら、数あるドレスの中から一枚を取り出し

「あなたにはこれが似合うんじゃないかしら？」

それをエリイへと差し出す。

それは濃い青色をしていて、両肩にかける紐の部分に兆度一つずつ小さなリボンがあしらってある、どこか清楚なイメージを連想される物だった。

「うわあー！これすごくいいです！」

エリイもそれを見て一目で気に入ったようだ。

自分の体にそのドレスを合わせて、すでにその場所へ行ってるかのように踊り出す。

「もうすっかりお嬢様気分ねえ。」

その光景を見てちよつと安心したかのように頬を緩ませるクリス。

「でも、ボクにはどーしても納得できない部分があるんだよねえ。」

リエンの声が背後から聞こえる。

「いくら仕事だって言っただって、クリスがこんなもの引き受ける訳無いと思うんだけど。やっぱり何か隠してるでしょ。」

その言葉がグサリと胸へと突き刺さる。

「い、いやねえ。なんも隠してないわよ。」

額に脂汗を描きながらリエンの方へと向き直り必死に弁解を図ろうとする。

「なんかかなり用意周到にしてる見たいだし。一直線バカのクリスがそこまでするなんてよほどだよねえ？」

先ほどよりもならに怪訝そうな顔でクリスの顔を覗き込む。

そうするや否や、急にリエンの肩に腕をかけ、彼女にしか聞こえないようなヒソヒソ声で

「ヤバイのよ。」

そう言い出すクリス。

「どうしたのよ。」

さすがに気を使つてか、声のトーンを押さえて続きを聞く。

「この仕事引き受けないとあたしの給料マイナスになっちゃうのよ。」

若干項垂れ気味に話し出す。

「一体何やらかしたのよ……。」

どうせそんな事だろうとは思っていたが。やはりため息をつかずにはいられない。

「いやあこの前引き受けた事件でね。派手にやりすぎちゃってねえ、請求書を叩きつけられちゃって。逃げ道が無かったのよねえ。」

たははと笑いながら頭を掻くクリス。

つまりこの仕事を引き受けない場合、自分の給料から弁償しろと言う事らしい。

今日の朝に急いで出かけたと思ったら、やはり呼び出しをくらったようだ。

「はあ……。まあクリスらしいと言えばクリスらしいけどさ……。どうせこれも厄介ごとなんでしょ？」

ただ舞踏会に行けという仕事ならクリスじゃなくてもいいだろう。

何かまだ裏があるに違いない。

そう思ったりエンがさらに踏み入れて聞き出す。

「そらそうよ。」

それを聞いて、何当たり前の事をとでも言わんばかりの表情をする。

「実はここの主催者がちよつと変わり者つて噂でね。もしかしたら悪魔が絡んでいるんじゃないかって事で調査、確認次第それを殲滅しろつて事なのよ。」

意外とこれ重要なんじゃないのかなーと思う事をしれつと言うクリス。

「で、それをみんなに言わなくていいの？つてか、後のメンバーどうするのよ。」

聞けば聞きたびに深いため息をつきたくなるのを必死に堪えつつそう言つと

「大丈夫よ。ほら、エリイはあんなに浮かれてるし。男二人もセロと、もう一人はもう大体目当てはついてるから。」

そう言つて肩に掛けていた腕をほどきつつ、背中をパシパシと叩く。「まあボクは関係無いからいいけどさあ。意外とクリスもひどいよねえ。」

ついには耐え切れなくなつたため息を吐きながら思つた感想をそのまま返すリエン。

「そんなこと無いわよ。ちゃんと夢を与えてあげてるじゃない。約一名だけだけど。」

そう言つたあとにボソツと

「あたしの給料の為にがんばってもらわないと。」

俯きつつも口元をニヤつかせながら言つた一言に少し戦慄を覚えたリエンだった。

リ「で、弁償代いくらくらいなのよ。」

ク「大体1000万くらい?」

リ「あんた何壊したんだよ!!!」

その1（後書き）

後1回か、2回ぐらい続くかと思われます。（現在執筆中・・・。）
Now Loading！

その2（前書き）

その1の続きです。ラストまでつっぱじります。

その2

ラグナロクSS 短編

Devil's Dancehall その2

一方その頃……。

「ふふふ……。もうすぐだよ……。」

暗く、静かな室内に男の声が響く。

その男の風貌はまだ若く、整った顔立ち、少し男性にしては眺めの金髪が特徴的だ。服装も一般市民など着ている物ではなく、とても高級であるう生地で作られた貴族独特の服装とでも言えればいいだろうか。とにかく普通に生活をしている人とは「格」が違うのだ。

その男性が薄暗い部屋で何をしているのかといえば。

男の前にある、透明なカプセル。その高さは、長身と言える男の倍近くはあるだろうか。

その中には、何か薄緑色の液体がカプセル全体に注入されており、カプセル自体はいくつものコードやパイプなどが気味悪く繋がっている。

そしてカプセルの中に、何やら人の形らしきもの？が浮かんでいるの見える。

男はそのカプセルへと近づき、頬をよせる。

「もうすぐまた会えるね……。ミセリイ。」

静かに、その名を呼んだ。

その瞬間だ、急に男が咳き込み始める。

手を口に当てそれを押さえると、掌にびっしりと赤い血がこびりついていた。

「もうあまり時間が無いようだ……。」

そう言ってカプセルに背を向け、静かにその部屋を出て行く。

今日は自分が主催の舞踏会があるのだ。そこで見つけなければなら
ない……。

その為には手段などもう選んでいる余裕は無いのだ。

そう静かに決心をする。

男が立ち去ったカプセルには、先ほど吐いた血がべっとりとこびり
付いていた。

ク「大丈夫！これはトマトケチャップよ！！」

エ「勝手に入っちゃダメですよ！！」

すでに日は落ち、辺りは夕闇が空を覆っている。

ここは首都プロンテラより少し郊外で、居住地区や商店街なども存
在しないようなところなのだが。

その情景に不釣り合いなくらいの大きな屋敷が一つ、聳え立っている。
侯爵マクレーン卿の屋敷だ。

プロンテラ城や聖魔研と比べると小さいが、それでもその存在感は
見事としか言い様が無い。

綺麗に刈られた庭園に、これまた馬鹿でかい玄関。

こういう表現をしているのは、もちろんクリスだ。

「全く、金持ちの考えてる事はよくわからないわね……。」

その玄関を見て、誰にも聞こえないようにボソリと呟く。

今は、いつもの仕事着（修道服のような物だが、動きやすいように
かなりアレンジしてある）とは違い、背中が大きく開いた黒いドレ
スを着ている。

「本当はもつとそつちもあるとよかったのだけれどねえ。」

その姿を見て、黒のタキシードを着たセロが感想を言う。

視線はクリスの胸元へと向けられている。少し寂しげな表情で。

「うっさいわね！これでもがんばったのよ！」

そう言いつつも白く薄いストールを巻き、あまり見えないように隠している。

「にしても歩きにくいわね、この靴は。」

もちろんつま先から頭まで、全て舞踏会の為に着飾らせている。

普段はヒールの高い靴は履かないので、違和感を見せないために結構苦労しているようだ。

「でもやっぱリクリスさん綺麗ですよー。」

その隣で、青いドレスを着たエリイが話しかける。

銀色の髪を後ろで束ね、同じ色をした青い大きなリボンをつけている。

その姿はいつもの子供っぽさを感じさせない大人の女性のようなのだ。

「いいわよねえ。あんたはあるからねえ。」

そう言つてエリイの胸元を恨めしそうに睨みつけるクリス。

「そ、そんな眼で見ないで下さい！恥ずかしいです……。」

エリイもこんな服は着たこと無いのだろうか（忘れがちだが、エリイは記憶が無いので昔は着ていたかもしれない）浮かれていた時とは違い、頬を赤らめて恥ずかしそうにしている。

「せっかく選んだんだからもっと堂々としなさい。大丈夫、十分似合ってるわよ。」

セロが素早くフォローに回る。

「で、こう言いたい事は色々あるんだが……。」

そんなやり取りをしている3人の間に声が割つてはいる。

「なんで俺なんだよ……！」

やっと言えたかのように、少し満足そうな顔をしているのがちよつと腹が立つ。

180cmを超える長身に、ブラウンの髪をした男性。そう、ハルトだ。

いつもはボサボサのままなのだが、さすがに今日はそういう訳にもいけないので、オールバックにセットされている。

服装も本当は黒くシックなタキシードにしたかったのだが

「こんな地味なもん着れるか!!」

と駄々をこねたので、真っ白なタキシードに赤色のピンポイントの蝶ネクタイをしている。

それでも「うーん、やっぱり地味じゃないか?」という発言にはもう誰も耳を貸さなかった。

「なんだかんだでノリノリだったクセによく言うわよ。」

その光景を思い浮かべながらクリスと言う。

「さすがにアルにさせる訳にはいかないでしょうよ。それにいざという時の護衛なんだから気を抜かないでよ。」

「え?護衛って何?」

クリスの発言にすかさず口を挟むハルト。

「それはあとで話すわよ。それより……。」

じーっとそのハルトが大事そうに抱えてる透明な容器を見ながら

「タッパーは置いときなさいよ。タッパーは。」

額に手を当てながら言う。

「え!?ハルトさん本当に持ってきたんですか!!」

横で見ていたエリイも聞かずにはいられなかった。

「だってアル達に頼まれちゃったしなあ。自分達には芋食わせといておいしい物食べに行くの?何て言われたらなあ。」

少し罪悪感があるのか、それとも正義感からなのか。

「だからって普通持つてこないでしょうよ。場を弁えなさいよ場を。」

「

いくらなんでも生活感がありすぎて困る。

「俺にはギルドマスターとしての責任があつてだな!!」

「どんな責任よ!!」

ついいつもの調子で怒鳴ってしまう。

もちろん、この場にはクリス達以外にも貴族の方々、有名人などが多数いらっしやるのでこの行為はとも目立つ。

「ク、クリスさん、ハルトさんも声大きいです!!」

周囲から突き刺さる視線に耐えれなくなったのか、ヒソヒソ声でエリイが口を挟む。

「「エリイは（エリイちゃん）黙ってる！！」」

すでにヒートアップしていたのか、二人して睨まれたので涙目になりながら一歩引くと、何かに体が当たったような感覚がする。

「あ！すいませ・・・」

そう言おうと振り返ると、そこには今日の昼間にテレビで見たような美男子がそこに立っていた。

「いえいえ、こちらこそ申し訳ございません。大丈夫ですか？お嬢さん。」

男はエリイの体に特に異常が無いかを確認すると、深くお辞儀をする。

一方のエリイはずっと固まっただまだ。

「だ、大丈夫ですか？」

ずっと動かないままのエリイを心配そうに見つめる男。

「ん？どうしたのよエリイ？」

それに気づいたクリスがそちらの方へと振り返ると

「マ、マクレーン卿！！」

今気づいたように驚くと

「す、すみません。お見苦しい所をお見せしてしまいました。」

そう言いつつ一礼をする。

「いえいえ。口げんかをするという事は仲がよろしい証拠です。」

そう笑いながら話す姿は貴族の余裕を感じさせる。

一つ咳払いをすると

「お初にお目にかかりますマクレーン卿。この度はご招待頂きありがとうございます。」

そう言つてドレスをつまみ、軽くお辞儀をする。貴族社会で言うカーテシーと言われる女性特有の挨拶だ。

「こちらこそ、噂は大司祭から聞いていますよ。クリス＝リンベルさん。」

その発言に一瞬眉をひそめたが

「これはお名前を覚えていただき光荣ですわ。」
すぐに笑顔で返す。

「とてもご活躍をなさっているようで。おかげで私達も安心して暮らせるというものです。一つ、お礼を言わせて下さい。」

そう言つて深々と頭を下げる。

「頭をお上げ下さいマクレーン卿、その言葉だけで十分ですわ。」
そうクリスが言う

「ささやかではありますがどうぞお楽しみ下さい。そちらのお嬢さんも。」

頭を上げつつそう言つと、いまだに固まったままのエリイの方を見ながら話す。

「ほらエリイ、いつまでも固まってないで挨拶なさい。」

しょうがないのでクリスが肘で小突くと、ハッと意識を取り戻したように動き出すと

「よ、よろしくお願いします！」

何かわけのわからない事を口走りながら深々とお辞儀をするエリイ。横からクリスの「何をお願いする気なのよ。」という声が聞こえてくる。

動き出したエリイを見て安心したのか、一度微笑むとまた一礼をして別の客人の方へと向かつていった。

「何か気にいらねえなあ。」

一連の行動を後ろで見ていたハルトがボソツと呟く。

会場に用意された、普段は絶対食べれないような豪華な食事をつまみながらだ。

「何がよ？ 優しそくない男性じゃない。ってかもう食べてるの？」
そう言いながらちゃっかりとハルトが用意していたタッパーにさりげなく料理を詰めているクリス。

「クリス、自然すぎるわよ。」

などとセロの声が聞こえてきたような気がするが特に気にしない事

にした。

「何かこう、俺達の事なんて見えてないかのようなのがなあ。」

ハルトが素直な感想を述べる。

「あんたレディファーストって言葉知らないの？あ、その料理あたしのなんだからとらないでよ。」

自分が食べようとした料理を見事にハルトにとられてしまう。

「ん？どこにレディなんていたっけ。あ、バカ野郎それは俺のだ。」
今度はハルトの近くにあった料理を奪うクリス。

「ここに素晴らしいレディがいるっていうのにあんた本当に目玉ついでんの？むっ！」

「少なくともこの素晴らしい料理は見えるから大丈夫だ。このっ！」
お互いが同じ料理をとろうとしたところでフォークがぶつかり合う。
「ただ・・・！女性しか見ていないって部分では同感ね！ちよっと引きなさいよ！」

「やっぱり何かあんのか・・・！？お前が引けよ！」
ぶつかり合ったフォークが今にも曲がりそうなくらいに軋んだ音をして、お互いが全く引かない状況だ。

「あれは本当に何かあるかもねえ。」

そう言いつつ、クリスとハルトが取り合っていた料理を横からかつさらうセロ。

「「あー！！」」

セロの口へと吸い込まれていく料理に、寂しげな表情でその行方を追いながら声を上げる。

「まるで何かを探しているような、そんな感じだったわねえ。ご馳走様、おいしかったわよ。」

体をくねらせながら何かよからぬ想像でもしているのだろうか。少し頬を赤くしているようだ。

「噂が本当なら、きつと今日動くはずよ。」

そう言いつつ、去っていたマクレーンの後を視線で追うクリス。

「だから何があるんだって。あ、これもらい！」

「だー！それはあたしのだつつつてんだろー！」

ちなみに先ほどから料理争奪戦が主になってしまっているが大丈夫か？

「大丈夫だ、問題ない。」

「うっさいわね！本編にこれを持ち込むんじゃないわよ！」

そんなやりとりをしている二人に対して

「これって・・・運命の出会い何でしょうか・・・。」

ある意味別次元の方向へと進んでしまっている一名にちょっと心配になってきたセロであった。

「お集まりのみなさん、本日は私主催のパーティーへ起し頂き真に有難う御座います。」

そんなやり取りをしていると、クリスマス達のいる会場の奥にある壇上へと一人の男が立って演説を始めていた。

先ほど挨拶されたマクレーン卿だ。

談笑をしていた他の人達が一齐にそちらへと視線を向ける。

「皆様がお楽しみ頂ける様に、今日は専属の演奏家の方々も来て頂きました。彼らの素晴らしい音楽もどうぞお聞き下さい。」

その言葉と同時に、マクレーンの近くで待機していた演奏家達4人が一齐に音を奏で始める。

バイオリンなどを中心に行われる弦楽四重奏と言われる類の物だろう。

この会場に見事にマッチした綺麗な旋律が部屋中に響き渡る。

「さあ素敵なBGMも流れましたし、皆様ダンスなどはいかがでしょうか。」

そう言つて壇上の目の前にある、机も何も無い空間を指してマクレーンが言う。

そこは客人達が優雅に踊るちょっとしたダンスホールだ。

「最初は誰もが遠慮するでしょうから、僭越ながら私が先導いたしましょう。そうですね・・・。」

そう言いながら壇上を下り、誰かを捜すように辺りを見回すと

「私と一曲踊っていただけますか？」

真っ直ぐクリス達の方へとやってきてゆっくりと一人の女性へと手を差し出す。

「へ？あ、あたし？」

つい先ほどまでハルトと料理の取り合いをしていたクリスへとその手は差し伸べられているようだ。

「はい、あなたですよクリスさん。」

優しく微笑みながら返答を待つマクレーン。

クリスは小さく咳払いをし、真っ直ぐ彼を見つめると

「私でよければ、喜んでお供させて頂きますわ。」

そう口調を直し、ゆっくりと差し伸べられた手を掴む。

「わゝ。クリスさんいいなあゝ。」

そう言うエリイの声が聞こえたのか

「次の相手はよろしくお願い致しますね、お嬢さん。」

そう小さく囁くと、クリスの手を取り中央のダンスホールへと歩いていく。

エリイの歓喜の声が聞こえたような気がしたが、特に気にしないでおこつ。

ダンスホールへと辿りつくとお互いに一礼をし、互いに片腕を組みマクレーンは腰に、クリスは肩へと組む事でオーソドックスなスタイルをとる。

「こういった経験があたりで？」

マクレーンが小さく囁く。

「あら、これでも最低限の作法は学んでいますのよ。」

小さく微笑みながらクリスが答える。

「それは失礼致しました。」

そう言い終わると曲が流れ始め、それに合わせてゆっくりと体を動かしていく。

3 / 4 拍子が特徴的なスローワルツだ。

ゆつたりとしたテンポで流れる曲に合わせて優雅に踊る姿は、今までのクリスマスからは想像できないほどだ。

「へえ〜。やるもんだなあ。」

流石のハルトもその姿を見て驚きの表情を見せる。

「あの子は元々あつちの世界にいるべき人間だったからねえ。」

一緒にそれを見ていたセロがボソリと呟く。その表情は少し悲しげでもある。

「ん？そうなのか？」

もちろんそんなことは知らないハルトが呆けたように聞くが

「何でもないわよ。それよりほら、ダンスパーティーが始まったわよ。」

よく見ると、クリスマス達のダンスに魅了された人々が次々にパートナ―と踊り始めていた。

その中心で華麗な舞いを見せるクリスマス。

「流石ですね。私も少し驚きましたよ。」

マクレーンが踊りつつも賞賛する。

「もったいないお言葉ですわ。マクレーン卿と踊らせて頂いてくれるだけで光栄ですのに。」

普段は滅多に使わない流暢な敬語で返す。

「いえ。私などは大したことありませんよ。他の方に比べればまだまだ貴族の端くれですから。」

そう言うマクレーンに、ばれない様に顔を伏せつつも少しニヤリとしながら

「あら、随分と謙虚なのですね。もっと強引な方だと思っていましたわ。」

クリスマスが少しカマを駆け始める。

そう元々料理を食べにでも踊りに来た訳でも無いのだ。

「あはは。たしかにそう思われる方も多いようで。」

だがそれも上品な笑いで返される。

なので、もうちょっと突っ込んでみる。

「これだけ回りに綺麗な女性がいたら、色々大変ではないのですか？ 侯爵も格好が良くていらっしやるからさぞかし人気があるのでしょう。」

悪魔で平坦と、普通の会話をするように。

「それほどではありませんよ。私には手に余りすぎます。」

まだだ。まだ足りない。

仕方ないので少し確信に触れてみる。

「それにしても、私先ほど変な噂を聞きまして……。」

少し怯え気味に演技しながらマクレーンの目を見る。

「一体どういった内容だったのでしょうか？ 何か恐ろしい事でも言われましたかね……。よければお話下さい。」

真剣そうな声で言うマクレーン。それは正義感に満ちているかのようだ。

「ええ……。実は……。」

そう言いつつ、少し言葉切る。これも本当に思わせる為の演技だ。
「侯爵が開催される舞踏会で、度々若い女性が失踪するという事を聞きました……。」

少し俯きがちにして話し、ゆっくりと顔を上げその表情を見る。

そこには、先ほどの笑顔の消えたマクレーン卿の姿が見えた。

「それは……。本当でしょうか……。」

まるで何も知らなかったかのように、物々しい表情で聞き返す。

「悪魔で噂です。私は特に気にしていませんので……。」

「

そう言いつつもマクレーンの表情の変化からは目を離さない。

そしてあるワードを言う。

「侯爵はたしかご結婚をなされていたからそういった事は心配していませんが。もし、誰か他人がやっているのであれば怖いですわね。」

「

またしても怯え気味に話す。我ながら女優でやっていけるのではと思ってしまう猫っぷりだ。

「女性を攫うなど言語道断です。もしこれが本当なら黙っているわけにはいきませんね……。屋敷の警戒を強くしておきましょう。」
まるで励ますように、力強くそう言った。

クリスは一度俯き、ニヤつきそんな顔を必死に戻しながら

「とても心強いですわマクレーン卿。もし私も見かけたら僭越ながらお手伝いさせて頂きますわ。」

何とか笑顔をしつつ返す。

「あなたが手伝って頂けるのであればこちらこそ心強いですよ。けれどご安心下さい、決してそのような輩を放つてはおきませんから。」

決意に満ちた表情でクリスを見つめながらそう話すマクレーン。

そしてそれと同時に曲が終わりを告げる。

「ご一緒させて頂いてとても光栄でしたわマクレーン卿。これ以上は他の女性に呪い殺されてしまいそうですので、これで失礼致しますわ。」

そう言つて一礼をするクリス。

「あはは。みなさん私達のダンスに魅了されていたようですから大丈夫ですよ。またよかったらお付き合ひ下さい。」

一度深々とお辞儀をする、

「では、私はまだ他の方の挨拶が済んでいませんので。これで失礼致しますね。」

そう言つて別の団体の方へと歩いていくマクレーン。

それを見送った後、ハルト達がいるテーブルへと戻るクリス。

「あー疲れた!!」

戻つてイの一番にそう洩らすクリス。

「なんだよ。楽しそうに踊ってたじゃねえか。」

いまだに料理をむさぼりながらハルトが返す。

「普段使い慣れない言葉だから神経使うのよ。何度あたしって言いそうになったか……。」

ぶつぶつ言いながらテーブルに置いてある、ワインの入ったグラス

を一気飲みする。

「で、どうだったのよ？」

近くにいたセロがヒソヒソ声で尋ねてくる。

彼には今日の事情を前から話していたのだ。

「クロね。ほぼ間違い無いわ。」

飲み干したグラスへとまたワインを注ぎながらそう言うクリス。

「今回のケースは特徴があるのよ。」

「何だ特徴って？」

何の事だか今だに分からなかったがとりあえずそう聞いてみるハルト。

「まず今回の件は悪魔が絡んでいるという事。これは大聖堂の情報だからほぼ間違いはないはずよ。」

アルコールが入ったからなのか、少し多弁になって説明を始めるクリス。

「で、何で悪魔が必要かって所なんだけど。これは公式の記録にも残っているから間違い無いはずなんだけど。侯爵は結婚されてすぐに奥さんを亡くしてるのよ。」

その時の侯爵の悲しみ様はひどいものだったらしいのよね。」

「へえ。そんな風にはみえねえけどなあ。」

客人と楽しそうに話をしているマクレーンを見ながらハルトが言う。
「あそこまで回復したのは奇跡だそうよ。何しろ部屋から一步も出なかったそうなんだから。」

さつき注いだはずのグラスがまたしても空になっている。先ほどから話しながらクリスが一気飲みしているのだ。

「で、立ち直った頃からこうやって舞踏会を数多く開催しているらしいのだけれど。それと同時に若い女性が失踪するって噂も流れ始めたのよね。」

「それはただの噂なんだろう？」

そう言ってクリスが飲み終わったグラスにワインを注ぐハルト。注げとジェスチャーされたのだ。

「だからこうやって裏を取ったのよ。あたしは”失踪”としか言っていないのにあの男、”攫う”と表現したわ。それに結婚の事に関しても何も触れなかったわね。」

普通亡くなった事を知らない風に話したら、現状の事くらい話すんじゃないかしら。」

アゴに手を当て、ちよつとした探偵気分に浸りながらさらに続ける。
「それで今回の悪魔の種類なだけど。人の願望に付け入って己を成長させる典型的なタイプね。まあ悪魔らしいと言えば悪魔らしいけど。」

「何でそこまで言い切れるんだ？」

その自信はいつたいどこからくるのだろうかと常々疑問に思っているが、大体返って来る答えはいつも決まっているのだ。

「勘よ勘。」

もう決まり文句のようなものだ。ただ、普通の人と違うのはそれがちゃんと裏づけされているのだ。

それにはハルトも関心させられるのだが。

「こじつけな感じもするんだよなあ。」

うつさいと文句を言われながらグラスを突き出されたので、しょうがなくまたワインを注ぐハルト。

それをまた一気飲みし、グラスをテーブルの上に置くと

「よし、じゃあ行つて来るわ。」

頬をピシッと叩きつつそう言うクリス。

「お、おい行くつてどこにだよ？」

一連の話を聞いたもののやはりまだパツとしないハルトに

「あとはセロに聞いてちょうだい。それとエリイをよろしくね……つて、あれ？」

そこでエリイがいない事に気づく。

「え、エリイ？」

まさかと思つて必死に辺りを見回すクリスに

「大丈夫、あそこよ。」

そう言つてセロが指す視線の先には他の男性に誘われたのか、一緒に踊るエリーの姿があつた。

否、あれは踊るといふ部類に入っているのだろうか。

やはり経験がなかったのか、男性と歩調もタイミングも合わずにつかえつつかえな見るに耐えない動きをしている。

間違えるたびに、「すいません・・・。ごめんなさい！」という声が聞こえてくる。

さすがの男性も引きつった笑顔で対応している。

「あれじゃあまだ貴族にはなれないわねえ。」

苦笑いを浮かべながら、その姿を見て少し安心する。

「クリス、あるとすればこの屋敷の一番奥。側近すら近づけない部屋があるそうよ。」

セロが耳打ちをしてくる。

「オーケー、じゃあ後頼むわねセロ。何かあつたらコンソールで連絡をちょうだい。」

そう言つて何気ない仕草で部屋の外へと出て行くクリス。

去る間に「ちゃんとエリーを見とくのよハルト！」と釘を刺されたものの

「何がなんだかさっぱりなんだが。」

項垂れながらボソリと呟く。

「要は男の未練が起した悲劇を止めましようってことよ。それよりほら、料理が無くなっちゃうわよ。」

「ぜんぜんわかんねーっすけど。」

そう言いつつもせつせと料理の残りをタッパーへと詰めるハルトだった。

ハ「しまった！タッパーが足りない！！」

ク「それは一大事よ!」
セ「もつどこからつつこんだいいのかしらね……。」

「やっぱ私には無理なのかなあ……。」

そう呟きながら会場の端っこでしゃがんでしょげているのはエリイだ。

先ほどの男性は曲が終わった後自分に一礼をし、逃げるように去っていった。

それもそうだ、あんな下手糞なダンスを見せては誰だって一緒に踊ろうとはしないだろう。

クリスが綺麗に踊っている姿を見て、一度は自分もやってみせると思ったのが間違いだったのだろうか。

この会場に来るまでの間にセロに教わった付け焼刃では到底無理だったのだ。

「はあ……。」

これからやってくるかもしれない幸せまで全て逃げてしまうかのような深いため息をつく。

こんな無様な姿では到底マクレーン卿とは踊れない。

いや、見て欲しくない。

女としての最低限のプライドなのか、これ以上恥を晒したくは無いのだ。

「はあ……。」

考えれば考えるほどため息が出てくる。

だが、現状はどうあっても変えられるようなものではない。

「クリスさん達のところに戻ろっかなあ……。」

そう思っただけ立ち上がろうとすると

「そんなに顔を下げていてはせっかくの美人が台無しですよ?」

ふと目前から声がしたのでそちらへと顔を向けると、そこに思いもよらぬ人が立っていたのだ。

「マ、マクレーン卿……！」

見間違いではないかと両の眼をこすってもう一度確認するが、もちろん形など変わるわけがない。

まさか自分が声を掛けられるなど思いもしなかったので、何を言っているのか言葉に詰まる。

「そんな所に隠れていないで、どうです？ 私と一曲踊ってはくれませんか？」

それを悟ったのか、優しく微笑みながらそう言うマクレーン。

「え……？ でも私……。あまり上手く踊れなくて……。」

きつと彼も見ていたに違いない。あんな中央であれだけの醜態を見せれば誰でも気づきそうなものだ。

自分のせいで彼にまで恥をかかせるわけには流石にいかない。

「先ほど言った言葉に偽りはありませんよ。それとも私では不満でしょうか……？」

戸惑うエリイに少し困った表情をしながらも柔らかな声を掛ける。

「そんな！ こ、光栄です！ でも、私でいいんです……？」

俯きがちにもう一度確認するエリイ。

「男に二言はありませんよ。」

そう言いながら手を差し伸べるマクレーン。

さつきまでの曇らせていた表情を一変して明るくさせながら

「は、はい！ よろしくお願いします！」

そう言って手を取るエリイ。

マクレーンに連れられ、ダンスホールへと歩んで行く。

今思えば、もうすでにこの時点で貧乏くじを引いていたのだということは、舞い上がったままのエリイに気づくわけもなかった。

そう、彼が薄気味悪い表情を浮かべていた事など……。

すでにたくさんの人たちが思い思いにダンスを楽しんでいるダンス

ホールへと向かっていく二人。

その兆度中央部分へと辿りつくつと、クリスの時と同じく一礼をするマクレーン。

ぎこちないながらもそれを返すように頭を下げるエリィ。

そして互いに手を組み先ほどと同じようなオーソドックスな体勢になる。

「大丈夫ですよ、落ち着いてください。」

先ほどの失敗が気になるのか緊張の色を見せるエリィに対し、優しく声を掛ける。

「は、はい！頑張ります！」

さすがに今度は相手が相手だけに自分のせいで醜態をさらす訳にはいかない。

曲が始まり最初のステップが入る。

無駄に足に力が入り、やはりうまくできない。

気持ちばかり焦ってしまう。

「す、すいません・・・。」

申し訳なさそうに彼の顔を見ながら言うつと

そんなことなど気にしてないかのように柔らかな表情で笑顔を見せるマクレーン。

やはりこれが貴族の余裕なのだろうか。自分のミスなど何の問題も無い様だ。

次第に、不安よりも負けていられるかという強気な思いに変化していく。

前向きに考えるようになったのはクリスの影響かもしれない。

「そうです、その意気ですよ。」

彼女の表情に変化があったのを読み取ったかのようにそう言うマクレーン。

そのせいもあってか、ミスばかりのダンスも少しずつましになってくる。難しい部分も何とか乗り切れることもできた。

「やった！できた！」

嬉しくてつい声に出してしまい、すぐに口を塞ごうとするが

「いいんですよ。やはりあなたは筋がいいですね。」

一緒に喜んでくれているように見えて、自分がとても高揚している事に気づく。

・・・もしかしたらテレビの時の事が起こるかもしれない！

そうささやかな期待すら抱いてしまいそうだ。

その時である。

辺りが一瞬グラつく。

「あ、あれ・・・？」

何か眩暈でも起したのだろうか。

視界を戻そうと頭を振るが、それとは反比例に自分を中心に世界が回り始める。

お酒など飲んでいないのに、まるで酔ってしまったような気分だ。

次第に下肢の力も奪われていく。立っているのも厳しい状況だ。

「ど、どうしたんだろ・・・？」

突如起きた事に上手く判断できない。

「どうしたのです！？大丈夫ですか！？」

マクレーンの声が聞こえるが、まるで自分が海底に沈んでしまったかのように遠くばやけて聞こえる。

ついには完全に力を奪われ、マクレーンによりかかるようにして倒れこんでしまう。

「すぐに医務室へご案内します！しっかりしてください！」

マクレーンの必死な声が微かにまだ聞こえる。

だが、それもここまでだ。完全に視界は閉ざされ、意識も遠のいていく。

・・・ああ、せつかくのチャンスだったのになあ・・・。

薄れていく意識の中で、突然の出来事への失望感と彼に対する罪悪感で埋めつくされいくのがわかった。

頬には一筋の雫が流れていた。

突然の出来事にすこしざわつく会場内。

「ん？なんだ？どーした？」

その異様な状態に気がついたハルトが辺りを見渡す。

「どうやら何かあったようだけど。」

隣にいたセロも気づいたようで、いそいそとその中心の方へと掛けていく。

「誰かぶつ倒れたのかねえ。」

そう呟きながら、いまだに料理に夢中になっている。

持って来たタッパーはすでに溢れんばかりほど満杯だ。

「これだけ持って帰れば文句は言われねえだろう。」

そう言つて、何か大事な事を忘れている事に気がつく。

「あれ？なんだっけ・・・？」

そういえば、さっきから一人足りないような気がする。

自分に、セロ。クリスはどうか行ってしまったし・・・。

「・・・あ！！！」

そこで思い出すと同時に、こちらへとセロがすごい形相で走ってくる。

「エリイが！エリイがいないのよ！！！」

「まさか！！！」

座っていた席を勢い良く立ち、すぐさま会場全体を見渡すハルト。

「あいつは！あの優男はいるか！」

同じく辺りを捜しているセロに吼える。

「ダメ！マクレーン卿もいないわ！」

しまった、完全にやられた。

クリスがいなくなったあとセロに内容を聞いていたとはいえ、まさかエリイがターゲットになるとは思いもよらなかった。

完全に油断していた。

「クソがつ！！！」

いても立つてもいられず会場の外の方へと駆け出していくハルト。
「待って！私も行くわ！」

セロもその後を追う。

自分にも隙があったことに悔いつつ、携帯コンソールを手に取る。
会場を出たところで立ち止まり、クリスの番号へと電話を掛ける。
ただ闇雲に捜してもしょうがないと思ったのか、ハルトもその場で
止まって、屋敷の護衛が手薄な所を捜しているようだ。

数コール待つと、電話が繋がる音が聞こえる。

『どうしたの？何か動きがあった？』

聞きなれた声が聞こえてくる。クリスだ。

「やられたわ。彼の狙いはエリイよ！」

そう簡潔に説明するセロ。

『はあ！？エリイが攫われたの！？あんた達何見てたのよ！』

クリスの怒声が響く。

だがそう言われても仕方が無いだろう。油断していたのは事実なのだ。

「返す言葉も無いわ……。完全にこちらのミスですもの……。」

罪悪感とも絶望感とも取れる声で返すが

『とにかくそんな事いつてもしょうがないわ。あんた達は奴の後を追って！』

今は無駄な討論をしていてもしょうがない。エリイが危険な状態なのは変わないのだ。

「わかったわ……。でもエリイは……。」

まだ大丈夫かと言いかけたところで

『大丈夫よ。多分奴が来るとしたらここだろうからね。』

クリスの声がそれを遮る。

「何か見つけたの！？」

期待感の籠ったセロの声に、フフリと鼻で笑いながら

『ええ。これで全部裏は取れたわ。』

完全に確信したような、自信に満ちた声が聞こえてきた。

「場所はセロの睨んだ通りのとこよ。見つからないように気をつけ
てね。」

そう言つてコンソールの電源を切るクリス。

今彼女がいるのはセロの指定した場所だ。その部屋は電気も付かず、
常に薄暗いようだ。

「さて、と。」

コンソールを上着に仕舞い、目の前にあるガラス状の筒を見上げる。
それは透明なカプセル状にできているようだ。

カプセルの中身は薄緑状の液体で敷き詰められ、そしてそれを繋ぐ
パイプ類やコード類が気味悪さを余計に増長させている。

「奴が何かしてるとすれば、どうみてもこれよねえ。」

そのカプセルへと近づき、その中身を確認しようとする。

遠くから見るとガラスが曇つていてよく見えないが、近くに行くと
次第にそれが何なのかわかってくる。

「これは……。」

その中身を見てさすがのクリスも絶句してしまう。

「え……。人……。なの？」

そう言いつつカプセルの下の方を見ると何やら文字が彫つてある。

「ミセ・・リイ？」

少し掠れていたので読みづらいが、ミセリイという名前は聞き覚え
がある。

たしか、マクレーン卿の「元」夫人の名前だ。

「これが？」

元、というのはすでにミセリイが故人になっているからだ。

と、なると推測するにこの中身は……。

「完全にイカれてるわね……。」

そう呟いた時だ。

この部屋へと近づいてくる足音が聞こえる。

「来たわね。」

そう言うと、どこに隠れるわけでも無く部屋のドアの方へと見据えてそれを待ち構える。

側近が近づけないのならば、この部屋に来るのはただ一人。

「説教だけじゃ済まないわよ。」

唇をかみ締め、込み上げる感情を抑える。

その思いを秘めた拳を握り締めて……。

その男は薄気味悪い笑みをこぼしながら長い廊下を歩いていた。

一人の女性を肩で抱え込みながら……。

「もうすぐだよ。もうすぐ会えるねミセリイ。」

男の体力はすでに限界に近づいている。

側近には着いて来るなど言いつけた。邪魔だからだ。

歩いている途中で何回か咳き込み、そのたびに吐血をする。

「はあはあ……。」

それでも歩みを止めようとはしない。

もうすぐ念願の彼女に会えるからだ。

男はある一つの願いの為に悪魔に魂を売ったのだ。

自分の命を引き換えにとある女性を生き返らせる。

それは自分の命を捧げるといふ物ではない。

もつと凶悪な……。他人の命、精神力を吸い取らせるといふ物だ。

もう何人を犠牲にしてきたかわからない。

すでに男の精神は麻痺していた。

否、狂気と化していたのかもしれない。

その姿は、人間の形をした悪魔といつてもいい。

それでも、男はただ会いたかったのだ。

理不尽な運命の果てに命を落とした彼女に。

今抱えている一人の女性の精神力を吸い取ればそれは現実の物とな

る。

彼……。悪魔がそう言っている。

流れは簡単だ。

彼から授かった力の中に意識を奪い、四肢の自由を奪う能力があるのだ。

それは対象に触れなければならない。

最初の女性はダメだった。彼女には悪魔に対して耐性があったようだ。

だが、これは違う。

見た感じ若いし、精神力を奪うには十分な逸材だったのだ。

悪魔の力は使う事に自身の命を削っていく。

恐らくこれが最後だろう、それもわかっていた。

だから、確実な素材が必要だった。

「はぁ……。はぁ……。」

階段を上がり、誰も近づけさせていない部屋の近くへと何とかたどり着く。

だが、ゆっくりもしてられない。

恐らくこの女性の連れが気づいている頃だろう。

ここで邪魔が入られる訳にはいかないのだ。

いくら女性といえど、人一人はやはり重たい。

壁にもたれながらも、奥の部屋へと歩いていく。

やがてミセリイが待つ部屋と辿りつき、一つ大きく深呼吸をする。

「付いたよ。お待たせミセリイ……。」

そう言っただアを開けた瞬間だ。

「随分と遅かったわね。」

部屋の奥から聞こえてくる声に戦慄を覚える。

「バ、バカな……。」

愕然とする男の前へと立ちはだかるあの時の女が目の前にいたのだ……。

「悪いけどその子返してもらえないかしら？」

さつきあつた時よりも、随分とやつれて見える男に怪訝そうな顔をしながら言うクリス。

「な、なぜここに・・・！」

男、マクレーンは驚いた表情でこちらを見つめる。

「自分でやってきた事を考えればわかるでしょ？それともあたしが何者だったか忘れたの？」

クリスもその視線を逸らさず、睨みつけるように返す。

「ちい。あの司祭感付いていたか。」

マクレーンが悪態をつく。会場での彼とは想像がつかないほどだ。

「随分な変わりようね。見たところもう限界なようだけど？」

彼が悪魔と契約をしたという事も大体想像がつく。

基、その調査の為にここまでやってきたのだ。

「なら邪魔しないでもらえますかね！もうすぐ、もうすぐミセリイに会えるのですよ！」

そう言つと、突如マクレーンの体からドス黒いオーラのようなものが出始める。

もう形振りなど構っていられないとばかりにその力は膨れ上がっていく。

膨れ上がったそれは鋭い槍状へと変化し、真っ直ぐクリスへと牙を向く。

素早くサイドへとステップしそれを避ける。

マクレーンはというと、その一撃を放つただけで血を吐き出し、その場へと蹲る。

もう抱えていたエリイの重さに耐えれないようだ。

「そこまでしておきなさい！あんた死ぬわよ？」

それでも男は鉛のように重たい体を叩き起こし、抱えていたエリイをその場へと置くと

「なぜ邪魔をするのです！私はただミセリイに会いたいただけなんです！」

まるでそれしか見えていないように叫ぶと、また力を溜め始める。そこで、クリスの何かがブツンと切れた。

「あんた自分で何をやってるかわかってるの！？これがあんたの会いたかったミセリイなの！？」

そう言いつつ、クリスの背後にあるカプセルを指して叫ぶ。

「これのどこが人間なのよ！！」

そう、そこにいたのは人などでは無かったのだ。

元は人の形であつたかもしれない肉塊。気味の悪い血管が噴出し、内臓らしき物がむき出しになり、脈打っている。

それはもう人間とは言えない代物だ。

「あんたがやってた事は生き返らす事でも何でもないわ！悪魔のいなりになつてただけよ！」

現実を叩きつけるクリス。

その言葉に捲くし立てられ、カプセルへと駆け寄りそこで愕然として膝を落とすマクレーン。

「ば、ばかな……。ミセリイ？これが……。？」

何かに冷めたようにそれを見つめ、自分のやってきた事に苛まれ始める。

ゆっくりとマクレーンの方へと向き直り、

「悪魔はね、人間の心の隙に入り込んで自分を成長させるのよ。あんたが救おうとした魂は、あんた自身でこの世に結びつけたのよ、こんな醜い姿でね。」

彼へ諭すように語りかける。

「私がやってきた事はいつたい……。？」

頭を抱え、その場に蹲る。

その姿を見て、完全に戦意を喪失したと判断し放置されたエリイの方へと駆け寄っていく。

「エリイ！？しっかりして！」

完全に意識を無くしているエリイを抱き寄せ、瞬時に何をされたか判断をする。

これが一種の状態異常だとすれば……。

それと同時に右手に精神力を集中させ、白く纏ったオーラをエリイの体へとあてがい一つの名前を唱える。

「リカバリー。」

それと同時に白いオーラがエリイ全体を包み込む。

特に名前を言う必要は無いのだが、あまり支援スキルが得意でないクリスにとって言霊を乗せるという時点では有用なのである。

名はそれ自体を示す。

リカバリーは状態異常効果を消す聖職者の基本法術の一つなのだ。

「……!？」

オーラが消えると共に目を覚ますエリイ。

「気がついた？」

目の前には見覚えのある顔が心配そうにこちらをみつめている。

「ク、クリスさん……?あれ……ここは……。」

自分が最後に覚えているのはダンスホールだったので、今一状況が上手く掴めない。

そんなエリイのおでこに手を当て

「大丈夫よ、ちょっと悪夢を見ていただけだから。何も心配はいらないわ。」

目の前の現実が見えないように、優しく声を掛ける。

「は、はい……。クリスさんがそう言うなら……。」

よく見ると兆度膝枕をされている事に気づきながらも、その心地よさに眠気が襲ってくる。

「今はおやすみ、エリイ。」

安心したように寝息を立て始めるエリイを確認した時だ。

ガシャン!とガラスのような物が割れる音がした。

「!？」

驚いたようにそちらの方へと視線を向けると、

そこにはすでに意気消沈したはずのマクレーンが、肉塊の入ったカプセルを叩き割っている所だった。

「何をするつもり!?」

クリスが部屋中に響き渡る声で怒鳴るが

「あは・・あはははは！ミセリイ、今会いに行くからね!!」

まるで頭の箍が外れたかのように、狂気にも満ちた声で高笑いをするマクレーン。

もう彼には何も聞こえていない、何も見えてはいえない。

目の前にあるもの以外何も無いかのようにカプセルから流れ出た肉の塊を抱きしめる。

(・・・まずい!!)

その光景を見て焦りを見せるクリス。

今までの状況を見るに、悪魔と契約をしている・・・いやそんな生易しい物ではない。完全に魂を喰われているのはマクレーンだろう。そしてあのカプセルの肉塊は、何人もの人間の生命力を吸い取ったいわば悪魔にとって格好の餌だ。

それが今、一つになろうとしている。

「やめなさいマクレーン!! あんた本当の悪魔になってしまっわよ!!!」

エリイを床に寝そべさせ、制止の声を上げる。

が、もちろんそんな声が届くわけがない。

どころか、人間の生命力がたっぷりと蓄積された肉塊がマクレーンの体を包み込み始め、まるで吸収するかのように飲み込む。

そしてそれは徐々に人間のような形を取り始め、足、手、顔と生える様に伸び始めた。

クリスは軽く舌打ちをつきつつ右の手の平へと精神力を集中させ、溜まった法力をまだ完全に形を成していない塊へと投げつける。

そのスキルの名はホーリー・ライト。

クリスと同じ聖職者が使用するそれとは違い、短い詠唱時間で尚且つ攻撃力を特化させた改良版だ。

右腕に溜めてから発動までわずか1秒。勢いよく飛び出された法力の塊は一直線に肉塊へと迫る。
着弾。

十字型の光が浮かびだすと共に、その衝撃による爆発で微かに肉塊が揺らぐ。

が、揺らいだだけだ。

爆発の煙が消えると、そこには何事も無かったかのように今だ形造っている無傷の塊がそこにあった。

「ダメか・・・！」

思わず声を漏らす。

さすがにこれで倒せるとは思っていなかったが、こうまで何も無いと少々計算外だ。

その間にも肉塊はさらに形を変え、遂には一人の人間のような姿になる。

そう、それは先ほど吸収されたはずのマクレーンによく似ているではないか。

それを見て、少し怪訝そうな顔をするクリス。

（完全に飲み込まれたわけでは無い・・・？）

そう考えていると、マクレーンの姿をした肉塊から何やら声が聞こえる。

「ソ・・・ソコニ・・・イタンダネ・・・ミ・・・セリイ・・・。」

もうそれは人間の声とは呼べない、ノイズの混じった機械声のように聞き取りづらいものだ。

しかし、あの状態になってまでも未だに彼女の名前だけははっきりと言っている。

「あなたはそこまで・・・。」

すでに意識まで悪魔に喰われているはずなのだが・・・。

「マダダ・・・。マダタリナイ・・・。」

潰れたような声で辺りを見回し始める肉塊。

目の前にいるクリスには見向きもせず、その隣に横たわっているエ

リイへと目をつける。

「イタ・・・！イタアアアアア！！！」

そう叫ぶと共に右の腕をエリイの方へとかざすと、それが伸び、肉の塊となつて一気に彼女を飲み込もうと襲い掛かってくる。

「エリイ！！！」

クリスが叫びつつエリイを抱きかかえ、さらに横つ飛びをし壁際へと転がり込む。

クリスが飛び込むのと、肉の塊が着弾するのはほぼ同時、一瞬だけクリスの方が早かったので何とか逃れることはできたのだが。

床に肉塊が衝突する衝撃で爆風が起き、着地の態勢を崩す。

それでもエリイを傷つけまいと、抱きかかえながら地面を転がる。

そして、すぐさま第二撃に備えようと相手を見据えた時にはすでに遅かった。

もう放たれていたのだ。

今度は本体から分離された肉塊がクリスの両足首から下を襲い、足と床に纏わり着くようにこびり付いて身動きが取れないようにされる。

「・・・っ！」

足首に鈍い痛みが走る。肉塊とぶつかった衝撃による物だろう。

だが、そんな事を気にしてる場合ではない。相手はこちらへとゆっくりと確実に歩み寄ってきているのだ。

微かな腐敗臭のする塊を振りほどこうともがくが、まったく外れようとはしない。

「モウニガサナイヨ・・・。ミセリイ・・・。」

だんだんと意識まで侵食されて来たのか、支離滅裂なことを言い始める。

「あんたの奥さんになった覚えはないわよ！！！」

口ではそう言つて返すが、内心は焦りの色が見え隠れする。

力づくでは外れそうにも無いので、先ほどのホーリー・ライトで塊ごと吹き飛ばそうと法力を集中し始めた時だ。

「オマタセ・・・ミセリイ・・・」

潰れた声がすぐ頭上から聞こえた。

「なっ・・・!」

まだ距離があると思つて油断したのか、一気に跳躍してきた事に気づかなかつた。

このままでは二人ともあの肉塊に吸収されてしまう。

咄嗟にエリイを抱え込み、迫り来る肉塊との盾になるように覆いかぶさるクリス。

そしてすぐ目の前までやつて来る大きな塊にも決して目を逸らそうとはしない。

ギリギリまでそれを睨みつけ、何か手は無いかと思考を巡らす。

最後まで決してあきらめない。

あきらめたらそこで何もかも、今まで築き上げてきたものが崩れ去ってしまうからだ。

エリイを抱きしめる腕が強くなる。

もうゼロコンマ何秒でぶつかろうかという所で・・・

それは、やってきた。

部屋の入り口辺りから投げ込まれた何かが、クリスへと迫る肉塊に衝突、それを吹き飛ばした。

けたたましい音と共に、部屋の壁へとめり込む肉塊。

よく見ると、人一人分ぐらいはあるつかという巨大な斧（ハルバード）と形状が似ていて、先端に矛がついている）が突き刺さっていた。

「大丈夫か!」

その声と共にそれを投げた張本人が駆け寄ってくる。

「ナイスタイミング!ハルト!」

クリスが声を掛ける。

後から追ってきたハルト達が追いついたのだ。

「あなた達ケガは無い!？」

一緒に来たセロがクリスとエリイの元へと駆け寄り、素早く体の状態を見定める。

医学の心得を習得している彼には、そこまで難しい事ではない。

「私はとりあえずこれが外れれば大丈夫。エリイも意識を無くしているだけよ。」

素早く自分達の状態を伝えようと

「大丈夫じゃないのはあつちよ。」

ハルトが吹き飛ばした肉塊の方へと視線を向ける。

そこにはすでにめり込まれた壁から抜け出した肉塊がこちらへと向き直りつつあった。

「なんなんだありゃ。」

その醜い光景に思わず息を飲むハルト。

「あれが悪魔に魂を喰われた人の成れの果てよ。」

唾を吐き捨てるかのように俯きながらクリスが言う。

「じゃあ、あれがマクレーン卿なの？」

その姿にセロも啞然としているようだ。

その間にも体勢を完全に戻した肉塊が自身の体に刺さった斧を引き抜き、こちらへと投げつけてくる。

「おわつとー!!」

それをギリギリの所で避け、通り過ぎる柄の部分を掴む。

「わざわざ返してくれるたあー随分ご丁寧じゃねえか。」

身動きがとれないクリスと肉塊との間に立ち、斧を構え戦闘体勢に入る。

「つつても、どうする？あれ優男なんだろ？やつちゃっていいのか？」

肉塊へと視線を逸らさないまま確認を取るハルト。

「もうあれは悪魔と同じよ。今更どうすることもできないわ。」

クリスがそう言うと同時に、あちら側も戦闘体勢に入ったのかまた腕を伸ばそうとしてきている。

「オーケーー!!」

そう言うハルトも斧を水平気味に振りかぶり、敵が放った腕を勢いよく振り回した斧で弾き飛ばす。

その衝撃で体勢を崩す肉塊めがけ突進。

斧を振り上げたまま跳躍、肉塊の頭上目掛け今度は上から振り下ろす。

「潰れる！！」

真っ直ぐそれは肉塊の頭を切り裂き、その体をも真っ二つにする。斧の重さで体を通り過ぎた刀身は勢いよく床に突き刺さる。

「あれ？以外にあっけねえな。」

床に突き刺さった刀身を引き抜き、終わったとばかりにクリス達の方へと振り向くと

「バカ！！油断するな！！」

今度はクリスの怒声が耳を突き刺す。

何事かと思つて先ほどの方へと視線を戻すと、真っ二つにしたはずの肉塊がまた修復し始め、

まだ体が戻らない状態のままハルトへと腕を振り下ろしていた。

「ちよつ！まっ！！」

咄嗟に斧を盾代わりにしてその攻撃を受ける。

が、勢いを殺しきれずに後方へと吹き飛ばされる。

ころころと後ろへと転がり、クリス達の所まで来てやっと止まった。
「いつてえゝゝ！！」

打ち所が悪かったのか、頭を押さえながら蹲るハルトに

「まったく、すぐ調子に乗るからそういう目に合うのよ。」

追い討ちをするかのようにハルトの頭を踏みつけるクリス。

肉塊の楔からは抜け出せたようだ。

「ひどい！ちよつとひどくないっすかクリスサン！！」

今にも泣き喚こうとしているハルトはとりあえず放っておくとして
「そろそろ終わらせましょう。」

そう言い、真っ直ぐ肉塊へと見据えるクリス。

肉塊はキョロキョロと辺りを見回し、まるで何かを探しているかのようだ。

「もうここにはあんたの望む者はいないのよ。」

そう呟くと、目を閉じ意識を集中させる。

思えば、未練などという言葉では片付く物では無いのだろう。悪魔にまで魂を売るほどに、一人の女性を愛していたのだ。ただそれだけだった。

「道さえ間違わなければ、こんな結果にはならなかったでしょうに・。
」

誰に言うでもなく、一人呟く。

「それでも、それでも会いたいなら・・・！」

目を見開く。その右目には赤い十字が浮かび上がっている。

「あたしが魂の引導を渡してあげるわ!!」

張り詰めた空気が一気にクリスの右腕へと集中していく。

その手には隠し持っていたブルージェムストーンが一つ握られている。

それへと法力を集中させ、形が維持できなくなるまで凝縮、飽和させる。

その際に生じたエネルギーを押さえ込み、目の前の肉塊へと拳を突き出す。

「せめて、あつちでは道を間違えるんじゃないわよ。」

それは情けなのか、願いなのか。

右腕から生じるオーラが部屋中へと風を巻き起こす。

異変に気づいたのか、肉塊がこちらへと向き戦闘体勢をとる。が、もう遅い。

「セイクリッド・ジャッジメント・・・！」

握りこぶしを開くと同時に放たれたオーラの塊は閃光となり、一瞬にして肉塊を貫く。

そしてそれを見定めたかのように頭上へと光の柱が襲い掛かる。

その光は肉塊を徐々に浄化し、形を失くしていく。

その中で、クリスへと囁く一つの声が聞こえる。

— 私達の魂を救ってくれて・・・ありがとう・・・ —

それは、マクレーンとは違う透き通った女性の声のような気がした。
「あなたも愛していたのね。ミセリィ……。」
そう呟くと、クリスにしてはめずらしく、悲しげな表情でその光が消えるのを見送った。

場所は移って、今クリス達がいるのはパーティー会場だ。

今回の事件に関して、側近と実は話がついているのだ。

何より、そもそもこの話を持ちかけたのが彼だったというのだから驚きだ。

その側近に先ほどの出来事を話すと、「この舞踏会が終わるまで待つて欲しい。」との事で。

「不思議な感じねー。」

テーブルに頬杖をついて、皆が踊っているダンスホールをつまらそうに見ながらクリスが言う。

「どうしたの？」

隣にいるセロが尋ねる。

「だって主催者がいないのにこうやって何も知らないで踊ってられるんだから。どーでもいいのかしらねえ。」

本当につまらなそうに答える。

「結局彼はどこまでも孤独だったのね。亡き人を思う余りに周りが見えていなかったのでしょうね。」

これも一つの愛の形よ、と体をクネクネさせながら言うセロ。

「まったくこっちは死に掛けたっつーのに呑気なもんよねえ。」

そうクリスがぼやくと

「おい、こっちにも心が死に掛けてる奴がいるぞー。」

色んなテーブルから余り物の料理を掻き集めて、おいしそうに食べながらハルトが言う先には、

体育座りをしながらポツンとダンスホールを見つめる一人の女性がいた。

「あつちはかなり重症よ?」

含み笑いを浮かべながらセロが言う。

「はぁ~~~~」

一生分の幸せが逃げてしまいそうなくらいの大きなため息をつくと「ったくしょうがないわね!セロちよつとこっちきて!」

頭を掻きつつ、そう言いながらセロの手を引いて会場の外へと大股で出て行くクリス。

「あり?どこいくの?料理食べちゃうよ?」

一人おいてけぼりをくらった感じがするがまあいいやとばかりに、残りの料理へとかつ食らうハルトだった。

ハ「料理、食う?」

エ「いいりません。」

彼女が見つめるのは、華やかに踊っている人達がいるダンスホール。その目はとても羨ましそうに見える。

(いいなあ・・・)

ああやって何事も無く時を忘れて踊れるってどんな気分なんだろうと思う。

せつかくのチャンスがまさかあんな事になるなんて誰が思うだろうか。

(私ってトラブルメーカーなのかなあ・・・)

悩む内にだんだん自分のせいなのでは無いかと思い始めてしまう。

(私がいなければクリスさんは危険な目に合わずにすんだし、マクレーン卿も道を踏み外さなかったんじゃない・・・)

もちろんそんな訳は無いのだが、一度出た自責の念は中々消え去るうとはしない。

(行くんじゃないかなあ・・・)

クリスマスに以前「あんま泣くんじゃないわよ。」と言われたが、やっぱり今も大泣きしそうだ。

精一杯我慢するが、自然と涙が溢れて来る。

「……うえ。」

もう止められないとばかりに声を出しそうになった時だ。

「どうされたのです？何か悲しい事でもあったのですか？」

一つの声がそれを遮った。

俯いていた顔を上げ、その声がする方へと向けると

そこには一人の美しい男性が立っていた。

特徴のある黄色い髪の毛をオールバックにし前髪を少し垂らしている整った髪型に、黒のタキシードがよく似合う。釣り眼の瞳の奥に何かミステリアスさを感じさせる。

この感じ、どこかで見たことがあるのだが……。

「お嬢さん？どうされたのです？」

その男性の声によってハツとする。

そして見惚れていた事に気づく。

「い、いえ！私は大丈夫です！」

先ほどの事など忘れてしまったかのように緊張してしまうエリイ。しかし、男性はホッと一息つくと

「お元氣になられたようで安心しました。」

そう言い、

「よろしければ、私と一曲踊っていただけませんか？」

柔らかい笑みを浮かべ、ゆっくりと手を差し伸べてくる男性。

「は、はい！」

気がついた時にはその手を掴んでいた。

男性に連れられ、ダンスホールの中央へと足を運ぶエリイ。

（どうしよう……。マクレーン卿の時より緊張する……。）

カチコチになりながら手を取り、踊る体勢を取るが……。

「す、すいません私あまり慣れなくて……！」

またひどい事になる前に先にあやまろうと頭を下げるエリイ。

だが男性は真剣な表情で

「お嬢さん、少し目を閉じて下さい。」

そう言われたので、素直に従うエリイ。

「いいですか、ここには私とあなたしかいません。だから自由に踊りましょう。ダンスは当人同士が楽しければそれでいいのですよ？」
そつと耳元で囁かれる。

「それとも私とでは不満でしょうか？」

「ぜんぜんそんなことないです！！」

閉じていた目をパツと見開き、即座に否定をするエリイ。

自分でも少し顔が紅潮しているのがわかった。

男は軽く微笑み

「それでは参りましょうか、姫。」

エリイのことをそう呼ぶと、曲の始まりと共に最初のステップへと入る。

右へ左へと軽やかに舞うスローワルツ。

不思議と足が自然に動く。

なぜだかわからないが、以前の時のようなぎこちなさを感じない。
そう思っていると

「ダンスとは相手と心が通じ合わなければ上手くいきません。」

まるで自分の心を見透かしたように男が囁く。

「少なくとも私の中では上手く入っている様に思えるのですが、どうです？」

男が聞く。

「は、はい！私もそう思います！いえ、今までで一番上手く入ります！！」

今までと言っても今日が初めてなのだが。

エリイの答えに対し満足そうに笑うと

「さあ、楽しみましょう！」

男の声と共に曲の一番の盛り上がり箇所へと入る。

「はい！」

元気に頷くエリィ。

その二人の光景に周囲も魅せられ、そして乗せられ、思い思いにワルツを踊る。

「おー！エリィちゃんやるじゃねえか！」

料理を食べ終わり、隅っこのほうで様子を伺っていたハルトも感嘆とした声を上げる。

「ああいうのって素敵よねえ〜。」

いつのまにか戻ってきたセロがハルトへと頬を寄せながら甘い声を出す。

「や、やめる気持ち悪い！！」

身の危険を悟ったハルトが一気に距離を取る。

「や〜ん、い・け・ず〜」

セロのウイנקを必死に見ないようにガードしながら

「ところで相手の男って誰だ？」

素朴な疑問を言う。

「ふふん、そのうちわかるわよ。」

セロの思わせぶりな発言にハテナマークを浮かばせながら

「クライマックスだな！」

本日最高潮を迎えたダンスホールを静かに見守るハルトとセロ。

もう途中の事は全く覚えていない。

気がつくとき曲が終わり、周りからの暖かい拍手で目が覚めたかのようになりを見回す。

「え？ええ？」

最初は誰に対してだろうと思っていたが、あきらかに視線がこちらへと向かっていたので戸惑うエリィ。

「皆、あなたのダンスに魅了されたのですよ。」

よく見ると男も自分へ向かって拍手をしている。

「これがあなたの力です。だからもつと胸を張って下さい。」

そう言つて、深くお辞儀をする男。

それに釣られるように深々とお辞儀をするエリイ。

「女性はスカートを摘むのよ。」

後ろからいきなりそう言われ一気に赤面し、その声の方へと向くとセロが立っていた。

「さあ姫、お帰りの時間ですよ。あちらに馬車を用意して御座います。」

エリイへとお辞儀をしつつ、会場の出口の方へと手を差し出すセロ。

「え？セ、セロさん？どうしたんです？」

いきなりの対応に戸惑うエリイに対し、

「いいのよこれで。とりあえず乗っておきなさい。」

エリイにしか聞こえないような小声で答えるセロ。

「は、はい！」

とりあえずこのままここにいても恥ずかしいので素直に流れにまかせることにしたエリイだが、どうしても男の事が気になるようで。

「あ、あの！」

男の方へと向き直り

「お、お名前お聞かせ頂いてもよろしいでしょうか！」

思い切つて聞いてみる事にした。

そうすると男は先ほどと同じように笑い

「もしあなたと私の出会いが運命だとするならば、必ずまた出会う事になるでしょう。その時に私の方から名乗らせて下さい。」

そう言つて手を差し出す。

一瞬考え、静かにその手をとって握手を交わすエリイ。

「また、会えますよね？」

そう言つと

「必ず会えます。私はきつとあなたが運命の人だと信じていますから。それまでしばしのお別れです。」

そう言いつつ、静かに手を離す男。

「さあ行きますよ姫。」

セロに急かされ、会場の外へと連れられる。

そうすると、本当に馬車が用意されているではないか。

「え？え？？」

またも戸惑うエリイに

「何を驚きになられてるのですか。先ほどの男性も見られているのですから堂々とお乗り下さい。」

セロがまるで当たり前かのように言う。

振り返ると男が手を振っているのが見えた。

状況が理解できなかったが、男が見てる手前下手な事もできないと思ひ、言われるがまま馬車へと乗り込むエリイ。

それを確認し、運転席へと移動したセロが馬車を操作する。

男はその馬車が消えるまでその場を動かない。

エリイもまた、その男が見えなくなるまで馬車の窓を見るのをやめなかった。

「まるでドナドナだな。」

その光景を見ていたハルトがボソツと呟く。

「売られていく子牛を見ているようですね。」

その隣から声が聞こえたので

「ですよね。」

とその声をする方へ同意するように向き直ると

「うおっ！さっきの優男！！」

まさかの発言にびっくりするハルト。

「だーれが優男よ！だれが！！」

さらにその男から聞き覚えのあるフレーズが聞こえた為さらにハテナマークが浮かぶ。

エ「この馬車どうしたんです？」

セ「勝手に拝借したの。」

エ「……。」

セ「いや、クリスがよ？」

エ「そういえばクリスさん達は？」

セ「後片付け。」

エ「え、どーいう……」

セ「はいよー！どーどー！！」

数日後。

暖かい日差しに包まれた室内で物思いにふけるエリイ。

数分感覚で、はぁ……。だの、今度いつあえるかな……。など呟いている。

「ねえねえクリス。あの日以来、毎日窓際であーやってエリイが変なことやってるんだけど何か知らない？」

心配そうにリエンが尋ねる。

「し、知らないわ。それより今日何食べたい？」

当のクリスは背中に脂汗をびっしり掻きながら話を逸らす。

「少しやりすぎたかしらね……。」

ボソツと呟く。

「ん？何か言った？」

「いいえ！ぜんぜん何にも！！」

その後、約1ヶ月に渡りエリイの病気は続くのでした。

完

その2（後書き）

すいません、一気に投稿してしまいました。

今回のテーマが貴族なのですが、正直よくわかりません！！

実際とはかなり異なる事が多いかと思いますが、どうかご容赦下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4049p/>

ラグナロクオンラインSS 短編 Devil's DanceHall

2010年12月25日18時26分発行